

米欧回覧

第34号
発行
米欧回覧の会
編集
メディア部会

NPO法人化へ骨子決まり、いよいよ申請へ

懸案のNPO化問題は、会員からのアンケート結果などを基に検討が加えられ、二月十二日の幹事会で骨子が決まった。会名については、「米欧回覧の会」を支持する声も多かったが、新しい時代を視野にアジア、アラブ、アフリカも含めてそれを象徴する「亜」の一字を挿入することになり、「米欧亜回覧の会」となった。なお、目的、趣意書、役員、新組織などに

ついては、現在検討中であるが、理事は幹事を兼ね、会の決定機関、執行機関は従来通り幹事会で行うことになる。申請は四月上旬、正式認可は七月ころと推定される。

(四頁に関連記事)

新年懇親例会盛況!

使節団最後の訪問国であり、日本との友好条約締結百四十年にあたるスイスをテーマとした新年懇親例会が一月二十六日(月)、日比谷松本楼で開催された。

(詳細は二・三頁参照)



新年懇親例会 (1月26日松本楼)



現代語訳を終えた水澤周氏と『米欧回覧実記』全5巻



水澤周氏「実記精読訳出の旅」の講演!

四月全体例会は、十七日(土)

四月全体例会は、四月十七日(土)、午後一時から国際文化会館の講堂で開催される。この例会は年度初めに当たるので総会も兼ね(年間の事業報告、会計報告)、今後の事業計画についても来年に迫った十周年記念行事と併せて議題にのぼる予定である。

また、水澤周氏が、懸案だった「米欧回覧実記」全五巻の現

代語訳という偉業をこの二月で成し遂げられたので、その二年近くにわたった大旅行、「回覧実記精読訳出の旅」のエッセイや秘話をご披露していただくことになった。乞う、ご期待である。

なお、その出版については「十周年記念行事」ともからんで現在企画が進行中である。

最近、極めて示唆に富む、興味ある二冊の本を読んだ。一冊は瀧井一博氏の「文明史のなかの明治憲法―この国のかたちと西洋体験」(講談社選書メチエ)であり、岩倉使節団の憲法体験、「伊藤博文の滞欧憲法調査」、「山縣有朋の欧米巡遊」の三章からなっている。そして終章には「外から見た明治憲法」と題して、伊藤の懐

う。「憲法」はその国の歴史に深く根ざし、そこから生まれてくるべきものだからである。もう一冊は勝田政治氏の「政事家・大久保利通―近代日本の設計者」(講談社選書メチエ)である。ここでは、大久保にとっての「米欧回覧」がいかに重大な意味をもったかを、帰国後の事跡に照らして詳述して

金子堅太郎が明治二十二年に「新憲法お披露目の旅」を行った際の欧米の評判を紹介している。金子はこの旅に伊藤が編集した公定注釈書ともいえる「憲法義解」の英訳書を携行し、

「憲法論議」が高まり、与野党とも真剣に取り組みを始めた今日、当会としては、現行の「平和憲法」と明治の創業者が求めた「この国のかたち」を比較考量し、近代日本五十年の歴史を通観し、世界的文明史的視野に立って、新しい「国のかたち」を探ることが重要であると思う。当会の来べき十周年記念の「グラント・シンポジウム」も、そのメインテーマはこのあたり

文明史的視野に立ち

新しい「この国のかたち」を求めて

泉 三郎

「この国のかたち」を求めた「この国のかたち」を比較考量し、近代日本五十年の歴史を通観し、世界的文明史的視野に立って、新しい「国のかたち」を探ることが重要であると思う。当会の来べき十周年記念の「グラント・シンポジウム」も、そのメインテーマはこのあたり

「この国のかたち」ともからんで現在企画が進行中である。

新年懇親例会 1月26日(月)

修好通商条約締結百四十年記念

スイスをテーマに盛會

日比谷松本楼にて

二〇〇四年の新年懇親例会は、一月二十六日(月)十八時三十分から日比谷公園内の松本楼で、山田哲司会員の司会進行によって行われた。

今年のテーマはスイスであり、恒例となった『実記』朗読は永島千代子会員が行なった。泉代表の挨拶に続いて、藤原宣夫会員による紹介と通訳により、ジャック・ルベルダン駐日大使から挨拶を頂いた。そして、日本スイス協会会長である近衛忠輝・日本赤十字社副社長による挨拶と乾杯により、格調高く幕を開けた。

ワインやフォンデュなどの料理を楽しみながらの懇談が暫く続く中、スイスに造詣の深い持田鋼一郎会員や使節団首脳のご子孫の方々のスピーチを頂き、その中で大久保利泰氏は、本邦初という貴重な資料を紹介された。

当日が八十才の誕生日となる倉本昌昭会員への祝杯という飛び入りも加わり、和やかな雰囲気でも満たされた。会は、二十時三十分は無事修了。

スイスの使節団が最初に日本にやってきたのは一八五九年。そして、一八六四年一月、ちようど百四十年前に正式の使節団と修好条約を結んだ。

泉三郎代表挨拶(要旨)

対して日本からスイスへの正式の使節団は岩倉使節団が最初で、米欧諸国回覧の最後の訪問地としてスイスを訪れた。そして二十六日間も滞在して、リギ山登山鉄道の開通式に案内されている。また、本国から帰国命令がきたジュネーブでは、市民の有力者がレマン湖周遊の船を借り切つて歓送会をしてくれた。久米邦武の『実記』の行間からその感激ぶりが伝わってくる。

それ以来百三十年経っているが、改めてスイスの方々のご厚情にお礼を申し上げたい。日本は百四十年の間に山あり谷あり再三戦争もあつて今



挨拶する泉代表



会場に展示された大久保利泰氏持参のスイスのレシートや「アンペール幕末日本図絵」など



藤原宣夫会員が軽妙な通訳でスイス大使の挨拶を紹介

日までできている。一方、スイスは戦争をせず、堅実に資本を蓄積して豊かな生活をエンジョイしている。日本と対極にあるようなお国柄だと感じている。今の日本の状況は、改めて米欧・アジアも含めて世界に学ばなければいけない、特にスイスからは学ぶ事が非常に多いと思う。今日の日だけでなく年間を通して改めてスイスを勉強したいと思っている。そして、秋にはツアーを組んでスイス

スイス共和国駐日大使 ジャック・ルベルダン氏のスピーチから

It's without a saying that everyone is welcome to Switzerland. Not because we had a hundred thirty years ago the important Japanese mission came that you should be excused not to come in the 21st century.

Ladies and Gentlemen, it's of course a very great pleasure for me to be here today for this New Year reception of the Iwakura Mission Society. I'm extremely pleased that you decided to make the year 2004 as the Swiss year to commemorate the 140 anniversary of Japan and Switzerland relations.

Let me recall one or two historical facts. On June 21, 1873, the Federal Consulate President of Swiss Confederation at that time officially received the Iwakura Mission. This mission also met what we call nowadays the civil society and visited not only Bern but also various parts of Switzerland.



大使曰く“a little bit expensive”なHotel des Belgues

One of the most important stop over was Geneva, which happens to be my hometown. And I'm glad to see that there are some pictures of Geneva here that I was very flattered to be that. The Iwakura Mission stayed for more than two weeks at this still existing famous Hotel des Belgues.

I'm convinced that we had still a lot of ancestors who showed courage, leadership and openness which we have still centuries to face the future in our relations.



駐日大使 ジャック・ルベルダン氏 大使は、赤十字創立五人委員会の一、アンリ・デュフル將軍のご子孫である。

岩倉使節団と赤十字 近衛忠輝氏の スピーチから

岩倉使節団のジュネーブ滞在中の七月一日、岩倉具視、伊藤博文は、国際負傷軍人救護委員会(現在の赤十字国際委員会)のモアニエ委員長のリマン湖畔の別荘を訪ね、一八六四年のジュネーブ条約(別名赤十字条約)への日本政府の加盟について話し合いをして

いる。
『米欧回覧実記』は、この件を「某氏ノ別荘ニ至ル」と一行記しているに過ぎない。委員会の記録によつて二人の訪問は明らかであるが、『実記』がその事実を伏せた理由は、恐らく条約加盟への国内の環境が整わない段階での接触を公にしたくなかつたからであらう。

後に日本赤十字社の創設者となる佐野常民が、一八七三年のウィーン万博の政府代表として使節団一行を迎え、ジュネーブ訪問に先立って各国赤十字社の活動の展示に案内し、条約の加盟と赤十字社設立の必要性を熱心に説いたことが想像される。
後年佐野常民は、次の言



近衛忠輝氏

葉を書き残している。

「文明といい、開化といえ、人皆直ちに法律の完備、又は機器の精巧等をもってこれを証すといえども、余は独り赤十字の如き盛大に至りしをもつてこれが証左となさんとするなり。真正の文明は、道徳的行動の進歩と相伴わざるべからず」
一方、伊藤博文も一八九九年四月十二日、長野県知事に請われて詩を作り、自ら揮毫して寄贈している。

十字赤章無敵響
千軍万馬接矛秋
如今誰問華夷別
一視同仁通五州
赤十字の精神を深く理解していればこそその伊藤の詩であり、日本赤十字社長野県支部に現存している。
わが国では目下、自衛隊の海外派遣や有政法制整備の議論が盛んだが、今日のリーダーが明治の先達と同様の深い人道的関心と文明的洞察を持っていることを願うのみである。

を旅してみたい。

大久保利泰氏のスピーチから

利通は、国内の事情で帰国命令がでてしまつてドイツから帰国し、残念ながらスイスには行つてない。ところが、利通の三男にあたる私の祖父はスイスを訪れている。

私の祖父は、先ず明治二十年にアメリカのエル大学、それからドイツのハールレ大学に明治二十七年までいて哲学の博士号をとつている。留学している間にあちこち旅したらしく各地のホテルや食事の時のレシートが残つていたので今日持参した。一八九〇年だから百年年以上前のことである。
リギ山のリギ・クルムというホテルにも行つていて、二代目でよう



ピエール・イブ・フックス文化広報担当参事官もスピーチ



近衛忠輝氏と歓談する司会を勤めた山田哲司会員



資料を手にスピーチする大久保利泰氏

やくスイス旅行を果たしたことになる。大使にお聞きするとこのホテルはまだあるそうだ。当時の地図と鉄道の時刻表も残っている。ご披露するのは今回が初めてだろうと思う。

和昭昭允氏のスピーチから

木戸が使節団でアメリカに行った時に、孝正、正二郎の二人の養子連れて行つた。孝正には二人の男の子があり、その長男が木戸幸一で終戦時の内大臣である。
木戸孝允は和田家に生まれ



倉本昌昭会員の80才誕生日とわかり全員で乾杯



和昭昭允氏

桂家の養子になり、慶応三年になつて藩主から木戸の姓をもつて改名。木戸幸一の弟の小六が和田家の養子となつて和田小六となつた私の父である。
使節団のメンバーの岩国藩、吉川重吉は私の母方の祖父である。従つて、祖父の二人とも岩倉使節団で外国に行つて

(写真) 松前孝廣
(写真) 岩崎洋三



永富邦雄氏
(伊藤博文ご子孫)



岩倉規子氏
(岩倉具視ご子孫)

創立十周年に向けた新たな飛躍の一步 NPO化に関する設立趣意書(案)

まともまる

さる二月十二日の幹事会で、全会員に配布したアンケートの回答も参考にしながら、設立趣意書の原案を検討した。その結果、以下のような「設立趣意書」がまとめられた。三月十九日(金)の幹事会では、この設立趣意書を含め、NPO法人化を前提とした会の性格と組織、名称などの最終決定のための討議が行われる予定である。

◆設立趣意書(案)全文

「米欧回覧の会」は、明治四年から六年にかけて米欧諸国を巡覧しつつ近代日本のグラウンドデザインのありようを探った「岩倉使節団」とその克明な記録「米欧回覧実記」の同好的研究サロンとして、一九九六年四月に、その研究者である泉三郎を中心に約八十名で発足した。

以来、この会は原典としての「米欧回覧実記」の講読グループ、「岩倉使節団」を源流とする日本近代史の研究グループ、「温故知新」の精神で日本の現在の課題を研究するグループの三つを柱とし、各種の国際親善、親睦交流の催し、内外の歴史ツアー、映像の会や機関紙、ホームページの制作などの啓

蒙・広報活動など、極めて活発な活動を行ってきた。その間、関西支部も設立されて、会員数は二百名を超えた。そして二〇〇一年十一月には、それまでに培ってきた力をもとに、会の創立五周年・国際シンポジウム「岩倉使節団の再発見と今日的意義」を、東京一橋の学術総合センターで三日間にわたって開催した。このシンポジウムには、内外から二十名を越す著名な研究者が集まり、多彩で実りの多い討議が行われ、聴衆も延べ千人という盛況を示した。この催しには国際交流基金、東芝国際交流財団、トヨタ財団からの資金援助もあり、その報告書は思文閣出版から刊行されている。

当会の特質はすぐれて学際的・業際的で、豊かなキャリアをもつ人材を多数擁することである。そしてそれぞれの思想的立場は幅広くまた異なっても、常にフランクで自由な討議が交わされることである。会の基本精神は、「岩倉使節団」の志を受け継ぐ「創業の精神」にあり、「米欧回覧実記」がもつ柔軟な思考と実証的なフィードバック、そして既成概念に

囚われない比較文明的視野の展開にある。その立場にたつて、「世界の中の日本」のありかたを見極め、そのあるべき未来像を探り、その成果を広く市民層、とくに若い世代に啓蒙し、「よりよい日本」、「よりよい世界」を築いていくためにいささかでも寄与・貢献する事を目的とする。

今後の展開については、すでに創立十周年記念の「グラウンドシンポジウム」や「米欧回覧実記」の現代語訳の出版という大事業も企画しており、これまでのような個人的で同好会的組織ではもはや対応しきれない状況になってきている。したがって、この際、組織的にも、資金的にも一段と充実をはかる必要があり、また、会の名称についても現代的視点から「米欧」の名には限界がありアジア、アラブ、アフリカをも視野に入れた「亜」を挿入すべきだという認識から、「米欧亜回覧の会」と改めたい。

以上、ここにNPO化を申請する所以である。

アンケートによせられた意見

昨年十二月、全ての会員に對して、NPO法人化を契機にした新しい運営形態や名称などに関する思案とともに、アンケートを送付した。送られてきたアンケートに記され

た会員の意見を報告する。

一. この会の良さ、魅力

集約すると「多彩な経歴の人々が集まって知的論議が交わされる自由な集まりであり、その中心に『実記』がある」というのが会員の考える当会の良さである。

二. 欠けていること、問題点

現状に満足し、とくに問題点を感じていない会員が多い。しかし、「部会の範囲に留まり会としての目標がない」、「横のつながりが少ない」とする会員もいる。

三. 今後に期待する活動・催事

現在の活動深化に加えて、「『実記』と使節団の実像や魅力を現在の日本人に広く知らせる」という外に向けた活動の必要性を感じている。

四. 参加したい部会

現在参加している部会の継続、複数の部会に参加したいとする人が多数を占めるが、入会して日の浅い人にとつては「部会に入っていないのかどうかすら、おっかなびっくり」という意見もある。

五. NPO化に際しての名称

新名称の試案は、
A 歴史塾「米欧亜回覧の会」
B 史塾「米欧亜フォーラム」であったが、活動に満足し、馴染んでいる現在の名称でよいとする人が最も多かった。数値的な集計は困難である

が、現状で良しを一〇とするのと、A案七、B案三といった配分である。また、「歴史塾」や「史塾」はいらぬという人が多かった。

六. 会費や賛助金、寄付金などについて

会費はもう少し上げても「良い会合にできれば文句はない筈」という意見、と会員減や、催事に参加しにくい地方の会員の負担感を心配する声がある。賛助金を募りたいが、そのために「会の趣旨や活動内容を広くアピール」したりNPO化が必要と感じている。

七. NPO化についての意見

NPO化は必要とする積極的な会員も少なくないが、「特にない」という人も多い。また、「幹事会と一般の会員の温度差を感じる」人や「色々な意見の人が集まったサロンのままで、うまく運営できるか」と心配する意見もある。

八. グラウンドシンポジウム案、発表したいテーマ

- ・ 会員の研究発表(伊藤博文論など)
 - ・ 明治初期のリーダーたちの危機感
 - ・ 日本のビジョン
 - ・ 日本人の生き方
 - ・ 教育問題 など
- (注)協力ありがとうございました

歴史部会
連続セミナー

中村教授の日本近代史第一回
「大正デモクラシーをどう見るか」
熱気溢れる―歴史部会

歴史部会は二〇〇四年一月二十九日午後六時から開催された。

神奈川大学中村政則教授の三回連続セミナーの第一回である。会場は一橋の学術総合センター二階会議室で、参加者は大阪からの会員も含め四五名と盛況であった。

最初に米欧回覧の会代表の泉三郎氏から挨拶と趣旨説明があった。

二〇〇三年七月の中村教授の例会講演(内容はニュース三十二号参照)は大好評だったのだが、日本近代一五〇年を一気に走り抜けたので、さらに細部が聞きたいとの声があり、これに応じて本連続セミナーが企画されたのが経緯である。三回に分けて各論を



中村政則教授

展開していただくのが狙いである。

また会としては設立十周年記念事業へつながるセミナーとしても位置づけたい、との内容であった。

続いて歴史部会の幹事、半澤健市氏による講師履歴紹介のあと講演に入った。

講演要約

いまなぜ

大正デモクラシーか

先年この会で司馬遼太郎論を話したことがあるが(内容は九十八年ニュース十二号参照)、司馬のように「日露戦争を境に日本は急坂を転げるように転落していく」という認識では大正期を積極的に位置づけることができない。

大正デモクラシーをどうみるかは第二次大戦の「戦後改革」の評価にも深く関係している。明治の自由民権運動だけでは戦後改革の「受け皿」にならなかつた。大正デモクラシーが短命に終わったこと



司会の半澤健市氏

の意味も現在の日本政治に関係させて明らかにしなければならぬ。

代表的な

三つの研究史の立場

三谷太一郎は政治過程、政党政治を中心に大正デモクラシーを考察する。職業的政治家の支配を視点として考える方法である。

松尾尊兌(たかよし)はインテリだけでなく広汎な民衆運動ととらえる立場である。民衆の政治参加を重視した視点である。

鹿野政直は大正デモクラシーが速やかにファシズムに道を譲った点に注目しその理由を文明開化に排除された人々の「怨恨」に求めた。人間社会の非合理的要素に注目する。

三つの立場は対立ではなく補完しあうが民主主義の概念にはちがいがあふ。時期をどう考えるかにも諸説ある。

米経済学者のJ・K・ガル

第一次世界大戦と
大正デモクラシー

ブレイスが『不確実性の時代』で言及したように第一次大戦の思想的、政治的な影響は第二次大戦より大きかった。改造の時代、デモクラシー、民族自決などの思想は世界的風潮となった。大正デモクラシーはこの世界史の流れの一環である。思想、運動、制度としての民主主義についても考察する必要がある。

民本主義(吉野作造)は天

大正デモクラシーの遺産

―現代史との繋がりに

皇制と帝国主義に弱かった。普通選挙法は治安維持法と抱き合わせだった。「内には民主主義、外には帝国主義」によって対外進出(侵略)が起った。

政党政治のシステムが機能していなかった。選挙の洗礼を経て衆議院に議席をもつ首相は敗戦までに原敬、犬養毅、浜口雄幸の三人だけであった。しかもいずれも暗殺されている。

「道楽族」の源流ともいえるべき「鉄道閥」などの利益誘導政治も現在につながっている。



大正デモクラシーが

薄命だった理由

世界的な一九世紀システム崩壊、すなわち国際金本位制、バランス・オブ・パワー、自己調整的な市場経済、自由主義国家の四つが、いずれも崩壊または後退したことである。大正デモクラシーもその世界的現象の一環として崩壊したのである。

以上で約八〇分に亘る講演が終わり休憩のあと質疑応答に入った。一五件という多数の質問や意見が寄せられたが中村教授は一つ一つ丁寧に回答された。全体で約二時間五分に及ぶ第一回のセミナーは盛況裡に終了した。

(文責) 半澤健市

二〇〇四年歴史ツアー

札幌講演会のご案内

五月七日(金)〜十日(月)に予定されている歴史ツアーは、桜花爛漫の松前、函館の五稜郭そして札幌の開拓記念館などを三泊四日で巡る予定。現在二十名が参加の予定で、松前一泊だけの旅もまだ申込み可能である。

今回のツアーには、歴史観光のほか左記のような講演会が予定されている。

◆映像・米国編
◆講演・田中彰氏(北海道大学名誉教授)

・演題「岩倉使節団の今日的意義」

◆日時・五月十日(月) 十三時三十分〜十六時三十分
◆会場・北海道庁赤レンガ庁舎二階会議室

この講演会だけの参加(無料)も歓迎しているので、北海道在住のお知り合いの方には非ご案内ください。また、講演会の終了後、田中彰先生を囲む夕食懇親会(別途費用六千円)も予定されている。

★お詫びと訂正

前号のニュース三十三号記事内で、「田中彰・北海道大学名誉教授」とすべきところ「札幌大学名誉教授」と誤記いたしました。謹んで訂正しお詫びいたします。



実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com

■第六十九回・小菅さん発表と忘年会

二〇〇三年十二月四日に開催された。第一部はほぼ毎回(六十九回)出席されている小菅心子さんの「欧米から見た岩倉使節団

(イアン・ニツシュ編)」について発表があった。

内容は、この本の成り立ち、使節団の公式目標、当時のアメリカにおける進歩について(ロックフェラー、カーネギー、モルガンなどの繁栄等)、アメリカ人の日本観、議会と使節団の関係、シヨセフ・ヘンリーのロビー活動、ワシントンにおける政界からの歓待、条約改正の交渉、使節団が得たものなどについて。

その後、水澤周氏より、使節団は当初条約改正の意図がなかったが、森・伊藤に同調、天皇の委任状をとり伊藤・大久保が日本に一時帰国することになったいきさつについての解説。同氏著の「青木周蔵」にはそのあたりの事情が詳しく書かれている。続いて、泉三郎氏よりコメントをいただく。

第二部は忘年会。七十回になんなんとする読

■第七十回・イギリス

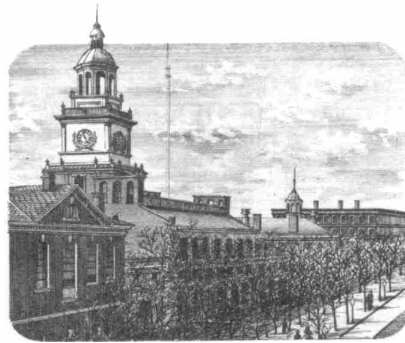
本年から約二年をかけて、米欧回覧実記の中心ともなる第二編イギリス(第二十一〜四十巻)を新しい切り口で取り組むこととなった。

いままで、音読・水澤氏の現代語訳・意見交換・解説というパターンできたが本年より、前回指名された各人が最低三行、現代語訳をすることが課せられた。

本文二十一巻英吉利国総説の貿易、工業・製作、風景、風俗をそれぞれ音読、現代語訳を一人三行くらいの予定だったが全員、全文を難なく現代語訳されたので、時間が大幅に足りなくなったが、これも七十回を迎える会の成果ということだろうか。

次回はもっと音読・意見交換の時間をとるということになった。 「読む会」の特色のひとつ、二時間あまりの勉強の後

のテイータイムにはかねてより病床にある合田さんのご回復を祈って、全員が一枚づつ手紙を書いた。当日出席者二十五人のこころのこもった感動的な手紙つづりを一冊にして合田さんに送られた。



フィラデルフィア独立会堂 (銅版画集)

ミスターフィラデルフィアと呼ばれるほど、使節団別働隊のことを調べておられた(第六十七回読む会報告参照)合田さんは、読む会でも率先して会計を引き受けてくださり、六時三十分開始にもかかわらず、五時ごろには現働いて下さった。

私たちの気持ちは合田さんに伝わったときくが、亡くなられたのは、言いようもなく悔しく、残念だ。ご冥福をこころからお祈りする。

(文) 多田幸子

★合田一夫氏追悼の記

合田さんといえばフィラデルフィアを連想するほどフィラデルフィアに強い思いを持っておられた。

NCRに勤めていた若い頃から米国に行く夢を持っていたという。昭和四十六年(一九七一年)に会社をやめて米国に一人旅にでかけた。以前、日本に来ていた留学生ヒギンスさんの面倒を見ていたことがあり、その方に自宅に來ないかと誘われたらしい。そこで五ヶ月もお世話になり、それ以降三十年の長きにわたって親交を深めたという。先方は世代が代わったが友情をお互いに大事にされたようだ。

ご本人は尊厳死協会会員で遺体を献体に出し、葬儀を止め家族だけで密葬された。享年七十歳。寄せ書きはご夫人が読んで聴かせた由うかがった。ここからご冥福をお祈りしたい。



合田一夫氏 (昨年の読む会に)

現未来部会報告

連絡 塚本 弘

Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371



tn@ne.jp

■部会報告

二月六日、講師に吹田尚一元三菱総合研究所常務取締役(前敬愛大学国際学部教授)を招き、「アメリカはどうか、日本はどう向き合うのか」というテーマで開催。

アメリカとは、「絶対的自由主義」信仰を有し、隔絶した軍事力により世界各国にこの自由主義の考え方を啓蒙しようとする国である。即ち、「理念主義的」法律主義的アプローチ」を基本とした外交政策がアメリカのやり方である。

対して、戦後の日本は敗戦だからしようがないと経済重視の商人国家を追求し、貴方任せの対応をしてきた。これが誤りである。大きく三つの点で問題が生じている。

第一は、安全保障問題。価値の多元化時代において、アメリカの「啓蒙主義的ナショナリズム」はもはや時代遅れになっている。しかし、このままでは日本は「世界の保安官の助手」になるしかないだろう。第二は、アメリカ的競争重視、個人の権利主張という価値観を日本の教育の中で受け

入れるべきか否かという問題。第三は、経済の問題。日米経済関係における米国からの各種の要求(ドル安・円高による産業競争力の低下、公共投資増大計画、「8%基準」による銀行の駆逐、「時価会計」「減損会計」による企業資産の剥げ落しなど)は、全て日本側に罪があるという一方的な自己主義の態度であるが、日本の経済学者は続々これに賛同。

以上のような刺激に満ちたお話に対し、出席会員から活発な賛否両論の議論が出され、「アメリカ」に対し日本がどう向き合うべきかについて、今後さらに真剣に考えていかなければならないということで議論を終えた。

(文) 塚本弘

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



●英語の勉強

英語の勉強になると思っているが、英訳実記を読む会」であるが、二百数十ページを終わった現在、原文「米欧回覧実記」の理解がより深まるという一石二鳥の成果

が得られ喜んでい。前々号で小林会員が指摘さ

れたことに全く同感であるが、これまで三百項目以上の注記を皆で訳し、新しい発見も多く、翻訳者の苦勞が偲ばれる。翻訳は通訳と同様、異なる文化や歴史の橋渡しをしなければならず、正確な直訳だけでは不十分である一方、余り親切に意訳すると原文の味が損なわれるという困難を伴う。しかも原文を完全に理解するには、漢籍の素養を必要とするので、現代日本語に訳すだけでも大変なのである。

●歴史の勉強

さて、使節団がワシントンに到着し、国会議事堂を訪問するくだりが私の当番に当たり、ロタンダ(円形大広間)に掲げられた絵画の話が出てきた。原文では「十帳」となっているのを、英訳では、「実際には八点」と訂正されており、注記にその八点の題名と画家の名前が記されているはずであった。ところが良く数えてみると七点しか記されていない。単なる不注意であるろうが、コロンブスの上陸からアメリカ建国にいたる歴史上の重要事件を描いたものなので、歴史の勉強のために調べてみた。その前に柴田会員が大

陸横断鉄道のくだりで、使節団が乗ったであろう車両内部の写真などをインターネットで探し出し、コピーを見せていただいていたので、私も「米国会

会議事堂」で検索してみると単に八点の画像とともに各場面の詳しい説明などが出てきた。その結果、抜けているのは、七点目の「コーンウォリス卿の降伏」(一七八一年、ヨークタウンにおける英軍の降伏により独立戦争は終結した)と判明した。六点目が同じ画家John Trumbullによる「サラトガにおけるバーゴイン將軍の降伏」(一七七七年、英軍の降伏によりニューイングランドの分離が防がれ独立戦争の転機となった)なので混同したのであろう。

●あら捜しの楽しみ

なお、久米の原文では、三点についてのみ場面説明があるが、その一つは「ワシントンの大統領選出」となっており、英訳もそのまま訳されている。これは何れも間違いで、正しくは八点目の「陸軍司令官を辞任するジョージ・ワシントン將軍」(一七八三年、アナポリスで開会中の国会に辞任を申し出た場面)で、文民による民主制を確立する上で重要な意味があった)であり、英文注記には正しく記されている。

一石三鳥ということになるが、インターネットによる検索を利用してこれからも、原文あるいは英訳文のあら捜しをおおいに楽しみたい。

(文) 三原浩

関西支部報告

連絡 山崎 岳磨

Tel&Fax 06-6853-3137

takechan@tcct.zaq.ne.jp



■例会報告

一月二十三日(金)、阪急グランドビルの関西文化サロンで新年会を兼ねた例会を十四人が参加して開催。

十一月の「関西歴史ツアー」の船戸さん撮影のビデオを鑑賞し、多くの方々から手紙などでお礼を頂いたことを報告。

待望のビデオ版「岩倉使節の米欧回覧」三巻を鑑賞した。ビデオ版はスライドの時より簡潔になり、それでいて新しく集められた資料や写真があつて、一挙に三巻見ても飽きることはなく好評だった。『米欧回覧実記』の原文がもっと欲しいとの感想もあつたが、スライド版も見えない会員が多く、集められた資料に感心していた。今後の関西支部の運営は、山崎世話人に加えて北村彰一氏と難波康熙氏が積極的に協力することになり、やはり『米欧回覧実記』を始めから、ゆっくりと読むことに全員賛成。次の集まりを四月十六日(金)、会場は今まで通り、凌霜クラブで開催することを決定した。

(文) 山崎岳磨

「米欧回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

部会 テーマ別に読む会、歴史、現未来、メディア部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹事 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局 当面「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 米欧回覧の会

<催し案内>

2004年3月～2004年7月の予定です

☆四月全体例会

日時：4月17日(土) 13:00～17:00
場所：国際文化会館 講堂
講演：水澤周氏「回覧実記精読訳出の旅」
総会：NPO問題、10周年記念事業問題

☆実記を読む会

日時：4月8日(木) 第24巻 倫敦府の記中
5月13日(木) 第25巻 倫敦府の記下
6月3日(木) 第26巻 里味陂府の記上
7月8日(木) 第27巻 里味陂府の記下
*本年度から第二冊、イギリス編、21巻から40巻までを約2年をかけて読み進む予定。(1回1巻の目安)
場所：南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話 03-5469-2090

☆英訳実記を読む会

日時：3月18日(木) 18:30～21:00
場所：国際文化会館 セミナー室
会費：1000円(食事・飲物はでません)
世話人 岩崎洋三 zaa96087@oak.zero.ad.jp

☆歴史部会

テーマ：日本近現代史(連続セミナー第3回)
講師：中村政則氏(神奈川大学教授)
日時：3月27日(土) 14:00～17:00
「戦後日本の岐路」
場所：学術総合センター会議室(神田一橋)
会費：2000円
*照会は半澤健市 khanzawa@dh.catv.ne.jp

☆関西支部例会

日時：4月16日(金)
場所：大阪凌霜クラブ会議室

.....ホームページのご案内.....

- ◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー
- ◇会の催し・部会活動の速報
- ◇<群像>岩倉使節団とその周辺(パネル30枚)
- ◇インターネットサロン(会議室) など

*皆様のご意見をお聞かせ下さい
(ホームページ編集に関心のある方歓迎します)

<http://www.iwakura-mission.jp>

編集後記

◇スイスをテーマとした新年懇親例会は盛会でした。単に宴会として盛り上がったというのではなく、当会が対外的にも認められるだけの組織力があることを証明した立派な運営でした。その裏方を支えたのは、藤原、山田の両幹事を中心とした並々ならぬ会員個々の力です。

◇外部に対して当会をもっとアピールしたいという気運が高まり、ニュースやホームページの役割が期待されていることは認識していますが、機材も技術も素人の域に留まり、なにぶん個人的な仕事で組織的な動きができていません。今回も発刊が遅れてしまいました。

◇NPO化などにたいするアンケートを見ると、当会の問題点として「横のつながりが無い」、会員歴の浅い人、「既存の部会に入りこめな」という意見がみられます。自由に参加できることが会の良さと思っている多くの会員の方には意外と思われるのではないのでしょうか。オープンな組織であって、「壁」があるように見えませんが、できるだけ積極的に部会や催しに参加して欲しいと思います。